

日本社会心理学会会報

205号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

〒602-8580 京都市上京区新町通今出川上ル 同志社大学社会学部 池田研究室

2015年3月24日

第59回公開シンポジウム

被災地の明日を探る社会心理学—福島からの提言

2015年度の公開シンポジウムは6月6日(土)に福島市で開催されることになりました。震災から4年、現在、被災した地はどうなっているのか、社会心理学の立場からの提言は進んでいるのか、学会として議論する場を設けるのは2年ぶりのこととなります。皆様、是非ご参加ください。

シンポジウムへのお誘い

第59回公開シンポジウム準備委員会 飛田 操

東日本大震災から4年が過ぎました。これまで経験したことの無い大規模複合災害に直面し、復興が進んでいるところもありますが、未だ多くの社会心理学的な問題が残されているばかりか、新しい問題が生まれています。

東日本大震災は、心のケアやPTSDへの対処といった臨床心理学的な問題だけでなく、ソーシャル・サポートの有効性、リスク・コミュニケーション、いわゆる「風評被害」、信頼と不信、デマや流言、コミュニティの喪失と再生といった社会心理学的な諸問題や、不安とストレス、レジリエンスといった健康心理学的なテーマの重要性を浮き彫りにしてきました。

日本社会心理学会でも、震災直後から、「東日本大震災を乗り越えるために：社会心理学からの提言と情報」を立ち上げ、多くの情報提供と提言をしてきました。また、2011年に名古屋大学での年次大会の中でシンポジウム「東日本大震災を乗り越えるために：社会心理学からの提言」を、翌2012年には、筑波国際会議場での年次大会においてシンポジウム「東日本大震災において社会心理学者はどう活動したか」を開催し、復興に向けて、多くの提言をしてきました。

このシンポジウムでは、福島の地から、改めて現在の被災地がかかえる問題について整理するとともに、今後の社会心理学的な課題について共有し、解決のための手がかりを得たいと思います。

最初に水田先生から、原子力発電所事故により全町民が強制避難の対象となった福島県浪江町の住民を対象とした調査の結果を報告していただきます。続いて、松井先生から、災害のさい大きな役割を演じてくれた災害支援者たちのストレスとそのケアについてお話していただく予定です。最後に、三浦先生から、被災地食品忌避の解消にかかわる問題について話題提供していただきます。いわゆる「風評被害」の解消にかかわる問題とも関連するはずです。

シンポジウムの先生方には、単に問題点を羅列するだけでなく、その問題を解決するための方策や手がかりまでも積極的に提示していただきたいとお願いしています。

現在の福島の姿を直接、ご自身の目でご覧になっていただければと思います。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。さらに、Ustream中継などの可能性を検討しております。詳細については、改めてお知らせする予定です。

お問い合わせ先はメールアドレス aps2015jssp@gmail.com まで。

(ひだみさお・福島大学)

《プログラム》

開催日時：2015年6月6日(土) 13:30~16:30 (13:00開場予定)

会場：コラッセふくしま 4F 多目的ホール (福島県福島市三河南町1番20号) (JR福島駅西口より徒歩3分)

話題提供：

1. 水田恵三氏 (尚絅学院大学)
「原発事故災害からの復興」
 2. 松井豊氏 (筑波大学)
「東日本大震災における災害救援者のストレスとストレスケアについて」
 3. 三浦麻子氏 (関西学院大学)
「被災地食品忌避は解消されたか：4波パネル調査による検討」
- 司 会： 飛田 操 (福島大学)

● 今号の主な内容

- 【1面】第59回公開シンポジウム (飛田 操)
- 【2面】第2回春の方法論セミナー (竹澤正哲・清水裕士)
- 【4面】第28期役員選挙のご報告 (岡 隆)
- 【5面】2014年度日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」
(相川 充)
- 【7面】研究会紹介：WebLab (川浦康至)
- 【8面】若手会員、声をあげる (川上直秋・THOMSON Robert John)
- 【10面】第56回大会のご案内
- 【10面】会員異動

《話題提供者より一言》

◎水田恵三氏より

東日本大震災後福島県内の多くの地方は、湾岸部で津波の被害を受けた一部の地区以外は、津波の被害はなかった。そのため彼らは今回の災害を原発事故災害と呼んでいる。今回報告する事例は福島第一原発の北に位置し、原発の直接の恩恵を受けていなかったにもかかわらず、事故後放射線量が高いために、もとの居住地に戻ることができずに、故郷を喪失した状態である町民数名へのインタビュー結果である。事故後4年が経過し、彼らがどのような心情で、状況で過ごしてきたのかを中心に報告する。加えてフィールドワーカーとして何ができたか何ができなかったのかを調査方法を中心として伝えたい。



◎松井豊氏より

これまで発表者は多くの共同研究者と、東日本大震災における災害救援者（消防職員、看護師・保健師、一般公務員、新聞記者など）を対象に、ストレス研究とストレスケアの実践活動を行ってきました。その中で得た知見を少し整理してお話しできればと思います。まだお話しの詳細は決まっていますが、①災害救援者のストレス反応は1～2年では減衰しないこと。②被災地内職員と被災地外からの派遣職員では、ストレス反応が異なり、前者は低減にかかる時間が長引くこと。③津波被害地の災害救援者に比べ、原発事故被害地の災害救援者のストレスは長引いていたこと。④本震災のストレスケア活動では、



精神科医や臨床心理学者からグループミーティングや自己開示を抑制する指針が提唱されたが、少なくとも消防職員では、職場内の自発的な会話やグループミーティングがケア効果を持っていたこと。などをお話ししたいと思います。

◎三浦麻子氏より

東日本大震災に伴う福島第一原発事故により、大規模な放射能災害が発生した。土壌や海洋の汚染がわれわれの生活に与える(負の)影響は、発災から4年を経過した今でも大きな社会的関心の的である。先の展開が読めない強い不安状況の中、さまざまなトラブルが発生してきた。代表的な例が「被災地で生産された米や野菜が売れない」という現象である。この現象は(少なくともある一面においては)個人がこうした食品を忌避する態度の集積として発現するものであろう。本報告では、被災地産の食品を忌避する態度に焦点を当て、被災地・首都圏・京阪神の一般市民を対象とした4波にわたるパネル調査データに基づいて、その時系列変化・地域間比較とそれらに関わる諸要因を考察する。



私自身は、震災の揺れをまったく体験せず、原発事故による間接的被害も受けず、また震災後に被災地を訪問した経験もごくわずかしかなかった。そんな人間が震災に関わる研究をしてよいか、という気持ちは常にあります。しかし一方で、「そんな人間」だからこそ、緊急事態に陥ったことにより認知的負荷が極度に高まり平常時の情報処理が困難になった状況での人間行動を知るためのある種の「絶好の機会」と捉えることができるのではないかと思いますし、そうすることで今後の社会生活に資する成果を挙げることもまた、社会心理学者に求められる仕事だと考えています。

第2回春の方法論セミナー

「GLMM が切り開く新たな統計の世界」開催

2015年3月25日開催の春の方法論セミナー、実験結果の再現可能性問題に斬り込んで学会内外の大きな反響を呼んだ昨年3月の第1回に続いて、第2回目の今年是一般化線形混合モデル(GLMM)が取り上げられます。なぜ今GLMMを学ぶべきなのか? 登壇者のお二人(竹澤正哲さん、清水裕士さん)から内容のご紹介をいただきます。

なお残念ながら当日来場できない方々のために、あるいは事後のふりかえりのために、セミナーの資料と録画映像を後日公開いたします。詳しくは [Web サイト](#) をご確認ください。

GLMM とは何か?

一般化線形混合モデル (Generalized Linear Mixed Model : GLMM) は、「変量効果を含む非正規なデータ」を分析するための統計モデルである。その特徴を一言で表せば「(ほぼ) 何でもできる統計モデル」と考えて良い。

たとえば社会心理学者も良く知っている一般線形モデル (General Linear Model) 分散分析と重回帰分析を統合したモデル

であるが、被説明変数は正規分布に従っている必要がある。GLMMではこの制約が大きく緩められ、「あり・なし」といった二値型のデータ、「りんご・みかん・いちご」などの多項分布、「0, 1, 2, ..., N」といった上限のあるカウントデータまで数多くの非正規なデータを扱うことができる。その鍵となるのが、確率分布とリンク関数という概念である。簡単に言えば、どのような確率分布とリンク関数を用いるかを、オプションとして選択する事に

より、多様なデータを一つのモデル内で分析できるようになる。

分散分析を学ぶと、変量効果 (random effects) という概念に出会うことだろう。おそらく統計に詳しい人を除けば、この概念の重要性とその意味はあまり理解されていないかもしれないが、集団—個人といった階層構造、反復測定 (被験者内要因)、ネストされたデータなど、独立性が仮定できないデータ構造を表現するための鍵となる概念である。GLMM の名に含まれる「混合モデル」とは、この変量効果を組み込んだモデルであることを意味する。

さて。このように GLMM は、これまで我々が知っていた分析道具に比べれば、それ一つで何でもできる道具という側面を持つ。だが、既に我々が知っているのと同じことができるだけならば、GLMM を学ぶメリットは何もないように思える。そして、我々が春の方法論セミナーのテーマとして取り上げることはなかっただろう。我々は、GLMM という統計モデルを学ぶことで「これまで知らなかった世界が」見えるようになって考えている。ここには2つの異なる意味がある。

変量効果、正規分布以外の分布を扱えることがもたらすプラクティカルなメリット

繰り返しとなるが、GLMM の特徴は社会心理学者が扱いきるほとんどのデータに対して適用できる、という点にある。そしてこの特徴は GLMM の最大のメリットでもある。

社会心理学者が今でもお世話になっている、分散分析と回帰分析は、とても有力な統計手法である。しかし、これら「線形モデル」は、1. サンプルが独立に抽出されている、2. 説明変数に対して均一な分散である、3. 母集団が正規分布である、などの仮定が必要である。我々はこのような仮定に対していつもどこかで目をつぶりながらなんとなく分析をし、報告しているのが現状である。

社会心理学は、「社会と心」という非常に広範囲な現象を研究対象にすることができる立場にありながら、統計手法に関しては独立で正規分布であるようなデータばかりを扱おうとしている。これでは豊かな現象をかなり矮小化してしまっていると言わざるをえない。

GLMM は、サンプルが独立に抽出されていなくても、データが正規分布でなくても、適切に現象の性質を推定することができる。例えば、経験サンプリング法で1週間、抑うつ度を測定したとしよう。多くの場合、抑うつ度は正規分布にならず、床効果が生じる。また各回答者からは複数データを集めているのでデータは独立ではない。このようなデータに対して回帰分析はもちろん、階層線形モデリングを用いたとしても、十分な予測は難しいだろう。

清水の発表では GLMM の第一のメリットとしての「社会心理学で手に入るほとんどのデータを扱える」点をいろんな事例を踏まえて解説する。具体的には上に挙げたような経験サンプリング法、個人-集団の階層構造を持ったデータ、そして反復測定データが、正規分布以外の確率分布を想定できるような場合である。**統計モデリングというパラダイムを理解するための入り口として**

GLMM が多様なデータ構造や分布をフレキシブルに扱えるこ

とがもたらすメリット。これはセミナーにおいて3人の講演を通して繰り返し明示的に紹介されるメッセージである。だが本セミナーにはもうひとつの大きな隠されたメッセージがある。

第1回春の方法論セミナーで岡田謙介氏が議論した通り、心理学を揺るがす再現可能性問題の源泉のひとつは、仮説検定というパラダイム、すなわち、 p 値に依拠して帰無仮説を棄却するか否かを判断する科学上の慣習にある。この慣習の下、我々研究者はモデルが正しいか間違いか、効果があるかないかといった二分的な枠組みで世界を認識してきた。これに対し、統計モデリングというパラダイムにおいては、研究者は複数のモデルを構築し、その中から最も良いモデルを任意の基準に基づいて選択する。そしてこのパラダイムの下では、研究者が探求する問いは「ある変数の効果があるかないか」から、「データの背後にどのようなプロセスやモデルが存在するのか」へと変化する。岡田氏の講演は、再現可能性問題から解き放たれるためには、停止規則や検定力分析という仮説検定パラダイムの内部に留まった改革ではなく、我々が依拠してきた方法論上のパラダイムそのものを転換する必要性を議論したのと言って良いだろう。

本セミナーの講師である久保拓弥氏による「データ解析のための統計モデリング入門」は、統計モデリングというパラダイムを学ぶための格好の書である。説明変数と被説明変数間の関係の記述という、我々社会心理学者が慣れ親しんだケースを題材として GLMM を学ぶことにより、少しずつ統計モデリングの考え方、その必要性が体に染みこんでくるように構成されている。GLMM を学ぶことには、それがないと不可能な分析ができるようになるというプラクティカルなメリットだけでなく、方法論上の新たなパラダイムを身につけるための手段としての意味がある。

最後に

GLMM の全てを、わずか半日のセミナーで解説し尽くすことはできない。このセミナーで概要を理解した後で自ら本を読み、人によっては自ら手でデータを分析していくことが必要となるだろう。だがそこから得られるものは大きいはずである。プラクティカルな意味では、GLMM は我々がデータ分析において直面する問題を解決する上で役に立つ。そして GLMM を学ぶことは、統計モデリングという方法論上の新たなパラダイムを知ることでもある。

強化学習の計算論モデルと脳機能イメージングの融合、認知科学におけるベイジアン認知モデルの浸透、印欧祖語の起源を探索する系統地理学的研究におけるベイズモデルの適用など、近年、様々な領域でこれまでに見たことがないような新しい研究が次々と生み出されている。こうしたブレークスルーの背後には、統計モデリングの発想が例外なく潜んでいる。科学の世界は、仮説検定パラダイムから統計モデリングパラダイムへと変化を遂げつつある。統計的モデリングの考え方を理解することは、科学の世界における最新の潮流を理解するための第一歩でもある。本セミナーが、日々の問題を解決するための、そして、新たな世界を知るための足がかりとなることを祈念している。

(たけざわまさのり・北海道大学)

(しみずひろし・広島大学)

第28期役員選挙のご報告

結果報告

選挙管理委員長 岡 隆

第28期の役員選挙は、役員の引継ぎを円滑に行うために、選挙日程全体を、従来よりも2ヶ月程度早めて実施しました。投票期間は平成26年11月4日から28日までとし、投票方法はオンライン投票と書面投票を併用しました。書面投票の申し込みはなく、すべてがオンラインによる投票となりました。前回の選挙では、書面投票の申し込みが1名ありましたが、実際には投票されませんでしたので、2期続けて、すべてがオンライン投票となったこととなります。

選挙管理委員会は、書面投票がなかったことを受けて、文字の判読など書面投票を前提としていた従来の開票方法を見直すこととしました。従来は、役員選挙、会長指名による常任理事の信任投票、理事による常任理事選挙のたびに、全員または複数の選挙管理委員、事務局担当常任理事、および事務局幹事等が、日本社会心理学会事務局に参集し、開票作業を行っていましたが、それらを、できるだけオンラインで行うこととしました。

役員選挙の開票にさいしては、選挙管理委員5名(坂本真士、佐久間勲、沼崎誠、向田久美子、岡隆)と事務局担当(古川佳奈)と事務局幹事(山本真菜)の7名が、パスワードを設定したウェブ上で集計結果を確認し、当選者、次点者、次々点者を決定していきました。同数の得票にさいしては、複数の選挙管理委員が立ち会って抽選を行いました。なお、選挙日程を前倒ししたことに伴う混乱を避けるために、今回に限って、事務局担当常任理事が選挙管理委員長を兼ねていました。以下、その開票結果をご報告します。

有権者数は1395、投票総数は384、投票率は23.4%でした。第26期の投票率が25.7%、第27期のそれが25.6%でしたので、今回は微減となりました。区分ごとの投票数、投票率は、表1をご覧ください。今回もメールニュース等で幾度か投票の呼びかけを行

いましたが、投票率に関しては、残念な結果に終わりました。これまでも言われ続けて来たことですが、投票率の改善に向けた何らかの具体的検討が必要のように思われます。

開票は、会長、全国区理事、地方区理事、監事に分けて行いました。それぞれの区分での開票時点または最終時点での当選、次点、次々点までの結果は、表2から表8をご覧ください。得票が同数の場合、重複しての当選の場合等については、役員選挙規程に則って処理しました。

開票終了後、当選者に就任の諾否を尋ねたところ、地方区理事(関東)当選の原由美子氏が就任を辞退されたため、開票時点の次点を繰り上げ当選とし、あらためて最終的な次点、次々点を決定しました。繰り上げ当選者から就任の承諾を得て、12月15日をもって、すべての役員を確定しました。

第28期の会長に当選した村田光二氏から、編集担当常任理事として沼崎誠氏、事務局担当常任理事として藤島喜嗣氏の指名がありましたので、平成27年1月5日から10日に、理事による信任投票を実施し、その結果、2氏とも信任されました。

大会運営、広報、学会活動、渉外を担当する4名の常任理事を選出するため、1月13日から17日に、理事による互選を実施しました。その開票結果は、表9をご覧ください。当選者に就任の諾否を尋ねたところ、亀田達也氏と中谷内一也氏が就任を辞退されたため、開票時点の次点と次々点を繰り上げ当選とし、あらためて最終的な次点、次々点を決定しました。繰り上げ当選者から就任の承諾を得て、1月28日をもって、唐沢穰氏、坂田桐子氏、三浦麻子氏、山口裕幸氏ら4名の常任理事を確定しました。

最後に、村田光二第28期会長から、新規事業担当常任理事として竹澤正哲氏の指名がありましたので、2月6日から10日に、理事による信任投票を実施し、その結果、同氏が信任されました。

以上で、第28期の役員が全員確定したことを、ご報告します。

(おかたかし・日本大学)

第28期常任理事会・担当

	新	旧
会長	村田光二	(村田光二)
事務局担当	藤島喜嗣	(岡 隆)
編集担当	沼崎 誠	(浦 光博)
大会運営担当	坂田桐子	(村本由紀子)
広報担当	三浦麻子	(池田謙一)
学会活動担当	山口裕幸	(相川 充)
渉外担当	唐沢 穰	(山口裕幸)
新規事業担当	竹澤正哲	

第28期会長と常任理事の紹介と就任あいさつ、各委員会の体制等につきましては、次号に掲載いたします。

表1 第27期役員選挙 投票数

区分	有権者数	投票者数	投票率(%)
会長	1395	326	23.4
全国区理事	1395	326	23.4
地方区理事(北海道・東北地区)	105	34	32.4
地方区理事(関東地区)	695	142	20.4
地方区理事(中部・近畿地区)	450	118	26.2
地方区理事(中国・四国・九州・沖縄地区)	138	30	21.7
監事	1395	326	23.4
*海外	7	2	28.6

表2 第28期役員選挙 開票結果(会長)

氏名	得票数	順位	当選者
村田 光二	105	1	○
亀田 達也	27	2	次点
池田 謙一	22	3	次々点
小計	154		
次々点未満	148		
白票	24		
合計	326		

表3 第28期役員選挙 開票結果(全国区理事)

氏名	得票数	順位	当選者
吉澤 寛之	51	1	○
亀田 達也	36	2	○
工藤 恵理子	23	3	○
五十嵐 祐	23	3	○
唐沢 穰	23	3	○
村田 光二	13	6	会長に当選
高比良 美詠子	13	6	○
池上 知子	12	8	○
安藤 清志	11	9	次点
西田 公昭	10	10	次々点
小計	215		
次々点未満	355		
白票	82		
合計	652		

表4 第28期役員選挙 開票結果(地方区理事:北海道・東北地方区)

氏名	得票数	順位	当選者
堀毛 一也	5	1	○
今川 民雄	4	2	次点
辻本 昌弘	4	3	次々点
小計	13		
次々点未満	18		
白票	3		
合計	34		

表5 第28期役員選挙 開票結果(地方区理事:関東地方区)

氏名	得票数	順位	開票結果	最終結果
大江 朋子	14	1	○	○
原 由美子	13	2	○	辞退
石黒 格	13	2	○	○
渋谷 明子	13	2	次点	○
松井 豊	11	5	次々点	次点
村田 光二	11	5		会長に当選
工藤 恵理子	11	5		全国区に当選
宮本 聡介	10	8		次々点
小計	96			
次々点未満	266			
白票	64			
合計	426			

表6 第28期役員選挙 開票結果(地方区理事:中部・近畿地方区)

氏名	得票数	順位	当選者
五十嵐 祐	50	1	全国区に当選
吉澤 寛之	16	2	全国区に当選
長谷川 孝治	7	3	○
中谷内 一也	7	3	○
唐沢 穰	6	5	全国区に当選
高井 次郎	6	5	次点
大坪 庸介	5	7	次々点
小計	87		
次々点未満	122		
白票	28		
合計	236		

表7 第28期役員選挙 開票結果(地方区理事:中国・四国・九州・沖縄地方区)

氏名	得票数	順位	当選者
坂田 桐子	7	1	○
清水 裕士	3	2	次点
森永 康子	2	3	次々点
小計	12		
次々点未満	13		
白票	5		
合計	30		

表8 第28期役員選挙 開票結果(監事)

氏名	得票数	順位	当選者
大山 七穂	14	1	○
相川 充	13	2	理事在任
大沼 進	8	3	次点
亀田 達也	8	4	理事に当選
三浦 麻子	7	5	理事在任
外山 みどり	7	6	理事在任
下斗米 淳	6	7	次々点
小計	53		
次々点未満	207		
白票	66		
合計	326		

表9 第28期常任理事選挙 開票結果

氏名	得票数	順位	開票結果	最終結果
亀田 達也	14	1	○	辞退
三浦 麻子	11	2	○	○
中谷内 一也	8	3	○	辞退
唐沢 穰	7	4	○	○
坂田 桐子	4	5	次点	○
山口 裕幸	4	5	次々点	○
相川 充	4	5		次点
工藤 恵理子	4	5		次々点
小計	49			
次々点未満	22			
白票	0			
合計	71			

* * * * *

2014年度「若手研究者奨励賞」決定

選考について

学会活動担当常任理事・選考委員長 相川 充

1. 選考の経過

本年度の「若手研究者奨励賞」の選考は、以下のように行いました。

2014年7月5日に、今年度の募集要項と応募用紙を学会のHPにアップするとともに、メールニュースで会員に告知しました。その結果、締め切り日(9/30)までに34件の応募がありました(昨年度の応募者数は55件でした)。

選考委員は、規程に従い、理事より2名、一般会員より2名、計4名で構成しました。なお、選考委員は、応募者の指導教員ではないこと、1名は女性であること、1名は昨年度との継続性を

考慮して昨年度と同じ委員であることを条件としました。選考委員の構成について、常任理事会で審議・承認していただいたうえで、下記の方々に選考にあたっていただきました。

[理事] 北村英哉(関西大学)、高橋伸幸(北海道大学)

[一般会員] 池上知子(大阪市立大学)、吉田寿夫(関西学院大学)

第1次審査では、34名の応募書類の個人情報部分(姓名、所属、指導教員など)を削除した上でPDF化したファイルを、各選考委員に送付しました(10/13)。各選考委員は、互いに匿名のまま独自に審査を行いました。選考委員長は、応募者の個人情報を知っているため、選考には加わりませんでした。

各選考委員は、審査結果を、A(優れている)、B(普通)、C(やや劣っている)で表記しました。ただし、A評価は各選考委

員5本以内としました。

選考委員長が、その評価結果を得点化し、合計得点によって、応募内容に順位を付けました。その結果を各選考委員にフィードバックして、第2次審査に入りました(11/24)。

第2次審査では、選考委員の名前をお互いに明らかにした上で、匿名のままの応募者の研究内容について選考委員同士のメールで審議をしました。

審議の結果、上位2件はすぐに合意に至りましたが、同点の3位が5件ありました。この5件を3件に絞り込む審査を重ね、4点にまで絞れましたが、この4点は、それぞれ審査者からの強い推薦があり、甲乙付けがたいという結論に達しました。そこで6名を受賞候補者にしたい旨を常任理事会に諮ることにしました(12/7)。

常任理事会、理事会に上記の経過を報告し、6名を受賞候補者の承認を得て、正式な受賞者に決定しました(12/10)。

受賞者に連絡するとともに、「日本社会心理学会ニュース」で、受賞者を公表し(2015年1/5)、本学会のHPに、選考経過と選考結果、および各選考委員の講評を公表しました(2015年1/18)。受賞者には、賞金と賞状を送りました(1/28)。

2. 選考の結果

本年度の受賞者は、以下の6名です(応募書類受付順)。

- 玉井颯一(名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程1年)社会的排斥の公正さを主張することの効果:“みんなのため”に追放することは承認されるのか?
- 中里直樹(広島大学大学院教育学研究科博士課程後期1年)日本人の幸福感停滞の原因に関する検討:協調性の共有信念による自由選択の感覚の低減が幸福感に及ぼす影響
- 白木優馬(名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程2年)感謝喚起による間接互惠性の連鎖
- 平島太郎(名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程3年)ポジティブティ・ネガティブティの同時活性による行動の柔軟性—社会的文脈に着目した検討—
- 河村悠太(京都大学大学院教育学研究科修士1年)「他者の目」が利他行動を減らすとき:評判への動機と規範情報に着目して
- 植村友里(淑徳大学大学院総合福祉研究科博士後期課程2年)利他行動の適応的基盤:関係深化シミュレーションを用いた検討

3. 選考委員の講評

各選考委員の講評は以下の通りです。

●北村英哉 先生

利他性の研究が多かった。寄付という従属測度が現れる援助っぽいものもあり、援助と近年の利他行動とは何が違うのか考えてみた。もちろん進化的観点や行動経済学と共通なゲーム理論の基盤、そして互惠性、評判、罰といった広がりを持つ視点が研究背景の違いであるが、それだけではないだろう。援助行動が助けを

必要としている人に対する行動であるのに対して利他行動は他者に資することだが、困ってなくていいし、日常のちょっとしたあげること(感謝のプレゼントも)。前提は相手の利得になることだが、自分が少し損する、コストがあるけど行うという点が重要だ。実に日常的に広く見られる行為で、さして自分がダメージを受けない範囲で互いに気遣いを交換したり、ちょっと寄付してみたり、もっと稼げるかもしれないのを遠慮してみたりすることで、まさに人の世の日常の成り立ち具合を描くものだ。しかし、大きな得失構造で多数の利益にならない個人利得が優先されるという一部官僚の行動などジレンマ問題以来の問いをも突き破る契機や射程を明瞭に意識してみると頼もしいかなと思った。

●高橋伸幸 先生

2年前にも選考委員を務めさせていただいた。その時と比較すると応募数は減少したが、レベルは全体的に上昇したと感じた。今回特に顕著に見られた特徴は、脳神経科学や生理学との接合をはかる研究が多かったことである。これらの隣接分野の研究数の増加は著しく、世界的には伝統的な社会心理学の研究領域は完全に射程内に入ったと言っても過言ではないであろう。従って、社会心理学の独自性を主張するのは、今後ますます困難になると考えられる。そのような現状においては、社会心理学の研究にそれらの知見を取り入れるだけでは、優れた研究計画にはならない。やはり、何らかの独自の貢献がなされる可能性があるものを高く評価したいと考え、今回の選考に臨んだ。その結果、例年より多い6件が受賞したが、受賞者各位が今後の社会心理学の発展に国際的に大きく貢献していただけるものと期待している。

●池上知子 先生

申請書を通覧して抱きました印象は、いずれの計画案も一定以上の水準を満たす内容で甲乙つけがたいというものでした。これは、最近の若手研究者の方たちの基本的スキルが全般に高まっているからではないかと思われまます。そのような中から選考されるには、着想の斬新さ、独創性において、他と比べて一歩でも抜きん出ることが求められるのかもしれない。斬新さや独創性の評価は審査者の主観にゆだねられる部分は大きいかと思いますが、今回の選考に関して言えば、人間のもつ心理的形質について、個人内過程だけの問題にとどめず、それがもたらす社会的帰結を巨視的レベルで考察しようとする姿勢、それら心理的形質が形成されてきたことの意味に言及しようとする姿勢が窺われたものが上位に上がってきたように感じました。個々の研究で明らかにできることは限られていますが、研究者の広い視野と深い視野が感じられるものが審査者の心を掴むのだと思います。

●吉田寿夫 先生

昨年に続いて、しんどいながらも、日頃の不勉強を補う良い機会を与えていただいたと思っています。2年間を通じてもっとも強く感じたことは、研究の意義、特に、望ましい社会の形成や私たちの社会的適応の促進に得られた知見をどのように活かすの

かについて、「どのような社会の形成を目指すのか」や「社会的適応とは」といったことに関する問い直しを行いながら、もっと深くかつ具体的に考えていただきたい、ということです。それから、当然のことかとは思いますが、「へえー」とか「なるほど」といった感覚を生じさせてくれる、示そうとしていることの脱常識性が高いと考えられる研究であるかという点が、私の評価をも

っとも左右したであろうと内省しています。また、このような審査においては、指定された紙幅の中で、審査者が当該の領域の専門家とは限らないことを踏まえた分かりやすい記述をいかにするか、ということが重要になると思います。

(あいかわあつし・筑波大学)

研究会紹介: WebLab

全国各地で開催されている研究会めぐりの旅。今回(ひとまずの最終回)は、WebLabのご紹介をお願いしました。これまでご紹介してきた研究会と比べるとややテーマ特化型ですが、9年で35回を数える開催があるというのは、そのテーマがいかに探索しがいのあるものであるかをよく示しているのではないのでしょうか。

ウェブラブのご紹介

川浦康至

ウェブラブはいまから9年前に発足した研究会です。正式名称はWebLabです。もしかしたら、と思った人もいるかもしれませんが、WebLoveではありません。ただ、ウェブ恋愛はWebLabで扱ってもおかしくはないテーマですね。

さてWebLabは来年、10周年を迎えます。今回の執筆依頼であらためて確認して気づきました。その1年前のいま、9年間をふりかえり、今後を考えるのもいいかなと思い、こうして書いています。

名称から、バーチャル研究室を連想された人もいるかもしれませんが、Webは研究対象です。つまり、ウェブなどネット上の人間行動や社会現象をテーマとする、CMC(Computer-mediated communication)の研究会です。

WebLabは、とりわけ若い研究者の発表の場でありたいと願ってきました。

こう書いてくると、まるでわたし一人で始めたような印象を受けるかもしれませんが、もちろん、そんなことがあるわけではありません。WebLab前史をご紹介します。

2006年6月、成城大学の川上善郎さんが、筑波大学の院生だった藤桂さんと佐藤広英さんに声をかけ、修士論文の研究(CMCに関するものです)を発表してもらいました。その場には私も同席し、議論が楽しかったことから、こういう場を今後も続けようと、飲み会の席ですぐまとまりました。藤さんと佐藤さんは、現在も研究会を支えています。

厳密に言うと、WebLabは(ゆるい)集団をさす名前で、会合としての名称はWebLab Meeting(略称WLM)です。WLMはこれまで35回開かれました。第1回の報告者は奇しくも、本原稿の依頼者である三浦麻子さんで、内容はYahoo!知恵袋に関する研究でした。

前号の会報で、工学出身のCMC研究者、小川祐樹さんが社会

心理学の研究を始めたきっかけにふれています。「博士課程の頃に参加した社会心理系の研究会に参加したことがきっかけでした」。それがWLMだったのです。その彼も、3年後の第34回WLMには報告する側として参加してくれました。うれしい循環です。

研究会場は、この間、東京経済大学と成城大学を行ったり来たりしました。世話人も変わり、3年前から同僚の北村智さんが引き受けてくれています。

WebLabでは随時、発表者を募集しています。発表者には、ささやかですが、懇親会ご招待という特典があります。申し込みをお待ちしています。

最後に、次回WLMのお知らせです。

2015年4月25日(土)午後3時から5時半まで。報告者に、東京大学総合防災情報研究センターの関谷直也さんをお迎えしての第36回です。東日本大震災におけるソーシャルメディア利用の分析結果と、その有効性にふれられる予定です。詳細は研究会サイト(<http://www.tku.ac.jp/~weblab/>)で、近々ご案内いたします。みなさんの参加を、お待ちしております。

(かわうらやすゆき・東京経済大学)



▲第35回WLM, 報告者はRobert Thomson(2015年2月14日)

199号のKSP400回記念特集をきっかけに、S研、NSP、社会行動研究会、そして今号のWebLabまで、多くの回数を重ねている各地のご紹介をいただきました。ご執筆くださった皆様、ありがとうございます。研究会の今後の益々のご発展を心より祈念いたします。

若手会員, 声をあげる

今回も、精力的に研究成果を挙げつつある気鋭のおふたかたから原稿をいただきました。川上さんの Science 投稿顛末記、トムソンさんの研究テーマとの衝撃的な出会い、いずれもとても読ませます。どうぞお楽しみ下さい。

最高峰への挑戦

川上直秋



さあ、実験を終えデータも整理出来たからすぐに論文にしよう！社会心理学者（特に若手）であれば当然の流れです。ここで一番悩むのが、「どこに投稿しようかな」です。自分の研究のアウトプットとして、なるべくならたくさんの人に読んでもらいたいし・・・、たくさん引用してもらいたいし・・・、何より有名な雑誌に載せたいし・・・などなど。自分の実験データと相談しつつ、いろいろと夢が膨らみます。想像するだけなら自由ですから。

さて、仮にその研究が自分の中で最高傑作だったとして、まず頭に浮かぶのはどんな雑誌でしょうか？ JPSP？ PSPB？ PS？ JESP？どれも社会心理学者なら垂涎モノの一流誌ですね。自分の研究業績にこんな雑誌が並んでいれば、少し嬉しくなります。で、私はと言うと、Science でした。以下では、そんな科学誌の最高峰へ挑んだ若手会員の顛末について綴っていきます。

あれは数年前の冬の日、学生と一緒にある実験を実施中でした。私はずっと閾下単純接触効果について研究をしており、人の無意識的な認知の可能性に魅せられていました。人は驚くほど高次の情報処理でさえ無意識に実行できるのです。その実験とは、あるストーリー性を持った動画を数十枚のスチール画像に分割し、順番に（あるいはランダムに）閾下呈示をしていくというものです。その後、ストーリーの主体となっていた刺激（図形やキャラクター）についての印象（活動性・力量性など）を測定しました。結果、驚くべきことに、画像を順番に閾下呈示した場合に限って、その印象はストーリー内容に沿ったものになりました（実験参加者はどんな画像が呈示されていたのか一切認識できていません）。これは、人が無意識に連続的な運動の背後にあるストーリーを認知しているという可能性を示しています。この結果を見て、私と指導教員（吉田富二雄先生）は狂喜乱舞しました。なぜなら、得られた結果が意味するところは、これまでの研究から明らかとなった無意識的認知に関する理解を大きく広げると考えられたからです。連続的な運動の背後にあるストーリーが認知されるためには、運動の持つ時間的・空間的な変化から一貫性を知覚し、それを知覚者の過去の経験と照らし合わせて解釈するという過程が必要です。それが意識的な気づきを伴わず無意識に行われているんです。これは

無意識が時間的・空間的な変化に柔軟なシステムであることを表しており、比較的にリジッドなシステムだと考えられてきたこれまでの無意識観を覆す可能性を秘めていると思われました。

私はかつてない確かな手ごたえを感じたのを覚えています。なぜなら、私のこれまでの研究のベクトルと、世界的な無意識研究のベクトルがマッチしたように思えたからです。人間の無意識に関する理解を、驚きを持って広げるという意味で、たいへんインパクトがあると思いました。そんなこんなで、いざ Science に挑むことになりました。

まず論文を書く際には、当然ですがその雑誌の求める基準というのがあり、それをよく考えないといけません。Science の場合、“most influential in their fields or across fields and that will significantly advance scientific understanding” な論文です。most が付いている時点で何となく構えてしまいます。そしてもうひとつ、“general interest”があることです。Science は心理学の専門誌ではないので、多様な分野の研究者が目にするようになります。そういった部外者がぱっと読んでも、「おおーっ！」と思う論文でないといけない、私はそう理解しました。この研究が導く新たな人間像とはどんなものだろう？心理学に限っても、単一の分野に留まらず、分野を横断するような視点はとても重要ですが、より general な視点から自分の研究を捉え直すというのは苦勞しますが、とても刺激的な作業でした。加えて、若干特殊な投稿形式に四苦八苦しなながら、いざ投稿。

投稿数が多い雑誌は、多くの場合2段階の査読が行われます。最初に研究内容について雑誌の基準から見てふさわしくないとエディター等に判断されれば、審査されることなくリジェクトです。Science の場合、この最初の段階で90%近い論文がはじかれるようです。とはいえ、Science に投稿したという事実だけでちょっとした満足感を味わえます。

さて、投稿から待つこと1週間くらい。Science の編集部からメールが来ました。“Your manuscript is now being sent for in-depth evaluation.” こ、これは・・・！そうです。最初の審査を通過し、本格的な査読が始まったことを意味します。少なくとも、私の研究は general interest があると判断されたと受け取っていいのではないのでしょうか。Science の最終的な採択率は7%くらいと言いますから、ここまでくれば五分五分の勝負だと、全くナンセンスな確率論で盛り上がります。

そして、そこから2週間くらい。お気楽にも期待ばかりが膨らみ続けます。そろそろ膨らみすぎて自然に割れちゃうよ、というタイミングでついに審査が返ってきました。・・・膨らんだ期待は1本の針で豪快に弾け飛びました。ほんの数週間の夢物語でした。

今回、その時の Decision letter を久しぶりに見ました。泣きそうです。3人の査読者が審査をして下さり、そのうち1人は“the

current findings are indeed very intriguing and worthy of publication in Science.”たいへん好意的な評価をしていただきました。しかし、ほかの査読者からは厳しいコメントが。研究内容自体は surprising で interesting だけど、研究の方法や先行研究が不十分だという評価です。ご丁寧にこういうことが必要だご指摘もいただきました。もちろん誰が査読してくれたかはわかりませんが、とても重みのあるコメントでした。最終的に、この研究はコメントを踏まえて、追加実験、追加分析等を加え、**Consciousness and Cognition** に掲載されました。ちなみに、オンラインで掲載されると同時に、無意識研究で著名な先生から、“This is one of my favorite papers of the year :-).”という嬉しいメールもいただきました。

こうして、私の最高峰への挑戦はひとまず終幕しました。結果的には残念でしたが、とても意味のある経験ができました。特に、自分の研究の general interest について、深く考える機会をもらいました。おかげで、新たに研究を始める時も、この研究はどういう general interest があるのだろうか、と、自問自答するようになりました。心理学の研究対象は人間、つまりは自分自身です。自分に興味がない人はいないでしょう。だから、「へー、人間っておもしろいな。すごいな」、心理学を知らない人にも、そう感じてもらえるような研究を続けたいと強く思っています。その追求の過程で、また Science にリベンジできるかもしれません。いつかそんな日が来ることを想像しながら、今日もせっせと研究に励みます。(かわかみなおあき・筑波大学)

比較インターネット心理学研究への道

THOMSON Robert John

2006年の秋。タジキスタンとアフガニスタンの国境を沿うパンジ川の川岸にある、人口7千人のイシュカシム町の郊外によくたどり着いた。ユーラシア大陸を自転車で横断するために日本を3カ月ほど前に出発し、ここまで自転車で合計4,000kmを走った。タジキスタンのパミール高原のムルガープ町



(海拔3,700m)を後にしてから6日ほどの間、人間をほとんど一人も見かけていなかった。そのときの旅は最終的に2年半かかり、25,000km近くを自力で旅したが、このワカン谷辺りがもっとも人里離れた場所だった。

イシュカシム町に着いた私が何よりも先にしたのは、母国の家族と連絡を取るためにネットカフェを探すことだった。しかし果たしてタジキスタンとアフガニスタンの雄大な山脈に挟んでぼつんと佇む町にネットカフェはあるのだろうか。だが心配は無用だった。以前訪ねた他の国の田舎町と同様、町の真ん中に町の唯一のネットカフェがあった。覗いてみたら、町の人々がMMOG(大規模多人数同時参加型オンラインゲーム)、SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)、オンラインチャットなど、様々な形でネット上のコミュニケーションに耽っていた。

た。受付の少年にいつからこのネットカフェが始まったのかを片言のロシア語で聞いてみたところ、半年前だといわれた。パソコンを買うのは高くは無理だけど、ネットカフェは格安だから、この町で初めてのネットカフェを開店してからずっと満席だと彼が説明してくれた。ほとんどのお客さんは半年前までパソコンに触れることがほとんどなかったと。



タジキスタンパミール高原に下る道
(海拔4200m, 2006年10月撮影)



イシュカシム町の郊外 (2006年10月撮影)

それまで私は、インターネット心理学とか、情報社会学といったテーマに特に学術的な興味を持っていたわけではなかった。しかしこの瞬間、インターネットという媒体の恐るべきリーチに圧倒された。世界に普及するインターネットへのアクセスは、その普及前にあった地域社会の対人関係の在り方にどう影響しているのだろうか。また西洋文化圏で開発されたインターネット・プラットフォームやゲームは、多様な文化圏の人々にどのように受け入れているのだろうか。私はこうした問題に対して強い関心を覚えた。

それから9年ほどが経つ2015年の現在までに、その関心はどのように発展してきたのか。実はこの5年間近く、私は上記の数々の疑問に対して実証研究の立場から回答するため、北海道大学国際広報メディア観光学院の修士課程、そして同大学文学研究科行動システム科学講座の博士課程において、多数の比較社会調査に取り組んできた。その主な目的は、インターネット利用者を取り巻くオフライン(現実世界)の社会環境の特性と、オンライン(特にSNS上)での行動や心理傾向との関連を明らかにすることである。そこで注目してきた社会環境変数は、「ある社会または社会状況に存在する対人関係の選択肢の多寡」と定義される関係流動性 (relational mobility: Yuki et al., 2007) である。一連の社会間比較研究を通じて、SNS上におけるプライバシー侵害懸念、自己誇示行動、オーディエンスの多様性と対人葛藤との関連など、インターネット上で観察される心理・行動現象の社会差を明らかにするとともに、その差異が当該社会間の関係流動性の差異によって説明可能であることを見いだして

きた。こうした研究の背景にある理論的前提は、我々人間の心理や行動は、自らを取り巻く社会のモーダルな特性に応じて適応的に方向付けられるという「社会生態学的アプローチ」の考え方である。様々な社会の人々の間に見られるオンラインの行動や心理傾向の違いの一部もまた、関係流動性の異なる社会環境への適応の帰結であると考えられる。

私にとって、このような研究の魅力は多面的である。もちろん理論的な面白味はあるが、理論を検証するプロセスにも深い意義を感じている。この5年間、比較文化研究でしばしば見られる2ヶ国の比較研究だけではなく、もっと一般化できる知見を探るために2012年に20ヶ国、今年は40ヶ国における多国籍比較調査も実施している。多国・多文化にわたる共同研究者と共同作業をすることがまずとにかく楽しい。また、ウェブ調査を中心的に行っているため、様々な文化的感受性に合わせて、

回答者にとって回答して楽しいと感じてもらおうためのアンケート設計を考えるのも楽しい。当然ながらその過程ではいろいろな困難も立ちはだかるが、こうした困難を乗り越えつつインターネットを国際比較のための研究ツールとして利用するためにはどのような工夫が必要なのかについて、これからも考えていきたい。

タジキスタンとアフガニスタンの人里離れた国境から始まった私の関心は、こうした形で実証研究として具現化し、発展してきた。今後も引き続き、人々を取り巻くローカルな社会環境と、そこにいつのまにか急速に侵入してきたインターネット、そして人々の心理と行動との関係を理解するための研究の旅を、今後も続けていきたいと思っている。

(ロバート・トムソン 北海道大学)

第56回大会のご案内

日本社会心理学会第56回大会は、2015年10月31日(土)と11月1日(日)の両日、東京女子大学(東京都杉並区善福寺)で開催されます。第1号通信は4月頃に発行される予定です。最新情報は大会 [Web サイト](#) で随時ご案内いたします。

■会員異動(2014年12月11日～2015年3月20日)

入会

《正会員》

・一般会員

梶谷一夫(出雲市長浜地区社会福祉協議会理事)、高野哲朗(伊藤忠商事株式会社監査部長代行)、竹下 浩(職業能力開発総合大学校能力開発院准教授)、星野崇宏(東京大学大学院教育学研究科准教授)、矢野 香(長崎大学地域教育連携支援センター助教)

《準会員》

赤見千尋(早稲田大学人間科学部人間情報科学科)

退会

草間俊郎(物故)、藤森立男(物故)

所属変更

佐々木真哉(社会福祉法人同愛会)、林幸範(池坊短期大学幼児保育学科準備室室長)、中里直樹(広島大学大学院教育学研究科)、藤本 学(立命館大学)、大久保暢俊(東洋大学人間科学総合研究所客員研究員)、河村真千子(カリタス女子短期大学/麗澤大学)、早坂正年(仙台青葉学院短期大学講師)、高田治

樹(立教大学学術調査員)

(会員名簿のお詫びと訂正)

川上典李子(誤)川上典李子事務所代表/公益財団法人三宅一生デザイン事務所→21_21 DESIGN SIGHT アソシエイトディレクター

川端美樹 目白大学 准教授→教授

杉森伸吉 東京学芸大学教育学部教育心理学講座 准教授→教授

膳場百合子 早稲田大学創造理工学部専任講師→准教授

『社会心理学研究』掲載(予定)論文

■第30巻第3号(2015年3月刊行)

《資料》

鈴木文子・池上知子「異性愛者のジェンダー自尊心と同性の同性愛者に対する態度」

■第31巻第1号(2015年8月刊行予定)

《資料》

正木郁太郎・村本由紀子「組織コミットメントが組織学習に及ぼす影響について」

《原著》

三浦麻子・小林哲郎「オンライン調査モニタの Satisfice 行動に関する実験的

研究」

■編集後記

これが第27期(広報委員会としては3期目)体制では最後の会報となりました。会報、Web サイト、メールニュース、ソーシャルメディア。媒体が一気に多様化する中で、何をどう発信するのが学会広報としてあるべき姿なのかを常に模索する日々でしたが、多分、一定の答は見えてきた気がしています。これからも広報活動へのご理解とご支援をどうぞよろしくお願い致します。

最後に、4年にわたり編集作業をお手伝い下さった范知善さんに心からの感謝を☆ (asarin)

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail : jssp-post@bunken.co.jp

掲載料：1件(1回あたり)1,000円(後日事務局より請求書をお送りします。)